



葶根七湯琴
五

ル 4
1124
5



ル 4
1124
5



菅根七湯纂卷之五

宮下の部

目録

- 一 湯病並効験
- 一 宮の下全圖
- 一 月三日月湯の記
- 一 白糸瀑布相海遠望の図
- 一 月八景之詩哥
- 一 滝湯掛り様の夏

附湯宿所載大間割札木の字



菅根七湯藥卷の五

湯宿五軒

藤屋勘右門

奈良屋兵治

伊勢屋八右門

三河屋五兵衛

山田屋安右門

効驗

頭痛

痲痺

腰痛

脚氣

積聚

中風

疝氣

風毒

筋け

喘息

眩暈

血塊

打身

痔漏

くちき

帯下

け宮の下へ菅根山のす腹山何れもくく土地くく家け
くくあたり西小南を連山彼傍のくく東のくく
湯本山をかしうりた小田原の大澤をえくく

眼不み堂々々々白糸庵 群明たりこの所戸敷
凡半軒半軒をな〜物も不自由を〜底余
ま〜四下の方落所つ〜なかりとらら滝沢橋
か〜み湯客の徳徳と感欠も赤をばの長〜
〜赤〜浴賓の足とつ〜ま〜温泉湯の
か〜い〜お〜やけの松ゆきりれささ〜とら
の法度〜か〜さ〜終〜さ〜の松真〜実
あ〜家あま〜病〜か〜つ〜〜松とよ〜在家
あり〜病〜〜人〜〜念仏唱〜人
一時千金と前ち〜お〜十松盤と首〜と
皆はおのか病〜〜は活玉の一世衆なり湯若壽
舞り〜上〜あ〜お〜さ〜け〜書院入側床
透ひ柳のの〜〜と〜と〜〜風流を極む終〜

高きの高奉〜ら〜タ〜あ〜の決火おる信衣公
と〜と〜鞠のあま〜袖か〜〜成おるぬ團奏乃
妙手業まら〜り〜風〜ら〜の鼻〜〜あ〜のれ
う生團と〜〜〜〜成ひの新古〜日敷の多〜少城
あ〜〜武ひの肉ふ〜き湯女のお〜〜ひ〜つ〜〜
ておのま〜か〜〜〜〜〜と〜〜〜〜病〜
あ〜〜〜〜病〜〜〜〜病〜〜〜病〜
〜のま〜〜〜
又家おし徳野権現と物徳ひ〜あ〜の候〜
ア〜と〜人協あ〜肉古の傲〜〜〜雑髪〜のり〜
り〜ら〜〜〜に〜〜〜〜社堂〜津田菴
横川の法樂の匂何孝
嘆の初は徳野危三度及過の花
津田菴
横川

橋のほとり朱の上道の入口仙名やとてふ葦向菱やの
むらひ態所柱尻の板下りたのこゝに碑あり石
の字も又天をくり橋中二丈二寸あり但し西へけ
換し又まさらざるをふびそのまゝふ字に

函関山溪深其地温泉多念此大滝温湯穴躬其
泉源底倉邑西列碑僻幽谷而極矣古來欲引
彼及是者久也雖然依山路險難而止矣興享
保壬子春宮下耆老某亦同謀其力以引乎彼温
泉抵于此也其行程凡八丁余功事遂成矣誠
浴之則愈也除良者不汚少可謂此地根元温
泉也於是村老某等頻尤書其来由依之應求
同享保癸丑冬十一月吉辰槩記其始未以備
不忘且述于此邑豊饒久基云

湯宿ののこり湯滝湯りて湯舟二三市町と
行ふ惣湯をきき良を去治り入りし〜〜〜
〜〜〜あり里人〜この湯は活け湯も
滝あり

表向や

橋吹のせ

文の志

表花



山やぶの門



是ヨリ
倉工家續
キナリ

宮の下全圖

東山... 湯... 山... 伊...

塔ノ沢より
来ル木道
十リ



此陽より舒明天皇の御製を以て減くを並陽のい
 さとてなすし幸ひりこの陽かこの温泉よま
 味も切も佳妙なりとて名附く三日月の湯と云ふ
 かの三日月の湯の本由を述べて尋ずる人王二十
 五代より舒明天皇二年の秋九月より折別有る心乃
 温泉の四篇より所奉ありと云ふ此の湯の涌本
 る所岩とてつこもあを括ひつら仙境にありや
 三日月の泉湯をねまき入るるとえいさし
 て月の影をそ霧り人氏の病苦を治しる温泉なる
 處とて思ひやりて亦も御製
 三日月の志不陽りう月了影を獲て
 くる痛もなき七のく
 三日月をす月ありく行橋のくくち之御製とて

七のく十とひつて四とをまね此陽より影と云ふ
 今此を陽月系成の器とてあるとの所記をかん是
 よちなきて一月の湯の御製の十の湯をのふと
 くの写し三日月の御製も佳し世のを
 と人の病苦を治し今もさのゆけやこのこれ
 月の湯は限もなき流をたき高き扱ひて来りか
 にもある湯の切をおさし者る者り也三白
 月の湯と号すを治りあつる

宮、下八景詩歌

明神嶽月

雲端磨出玉盤圓
 思量靈壇類塵跡
 影映蘆湖管嶺鮮
 却疑明鏡掛山巔
 此處より林の宮居よりくるをやらはる山の瑞の月

鷹巢山嵐

鷹巢秀碧推群嶽
更好中 虛望籟發

自是相別小士峯
乍吹雲霧披山客

巨海遠帆

雲浸巨海混煙波
誰慕乘槎仙客跡

天畔凝眸帆影過
滿船風勢壓星河

堂々鳴瀑布

瀑流千仞撒烟谿
借問夢窗飛錫否

仰望顛厓眼更迷
西天有路白雲槎

底倉啼猿

綠樹重陰隔夕陽
客中莫聽曉猿叫

溪間烟簇漲温湯
縱濟病身亦斷腸

早川鳴湍

奔波激石一川急
河伯欲殫泉室宴

晝夜潺湲暫不休
引來水樂洞中流

東明院鐘

日沒西山暮色催
嶺雲遮晝東明院

卧看林樹乱鴉回
忽有鐘聲撞破來

宮城野萩

箱根山麓艸萋々

風弄萩花舒錦茵

月色いよいてめりきり 明くけき名々あふ寺の鐘をひき

均亦



誰寫 奥州 優勝地

年々 勾引 浴湯 入

誰もきつて、何ういふをまゝと云城跡の名をうゝ家入秋之松の花

乃仲中納言いこちらのく言城跡の萩りめてく長根

よ入まて都のつとよ志ありま城跡のともごと

取の名をうゝくく温泉の山に泳といなりぬ

こちらのくれ萩と陣方うゝとこぬ

下巻

遊鴉

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 奥州, 優勝, 浴湯, 入, 萩, 陣, 方, 遊, 鴉]



小田原大洋

白糸滝



鷹ノ巣山

宮下市中

明星ヶ嶽

世所の湯を取らるるに在りては東都とありしに故に
春の末より秋の初めまで湯を飲まざるに清原方の
湯治をなすにちこ乃言の下年ひに接の湯治なりと云
幕末赤坂の湯の園礼年より絶て商家より利を
並へるる事あり

六のかわと家より内湯滝湯とありあり内湯と
温泉の水を種と種ありあり家より湯ありあり
て入湯ありあり大滝湯とあり種ありあり
浴をとりけりけり滝のやけにありありけり病を
うきまぬありあり世所ありありけり法ありあり
ありと記しありあり後人のたより少くあり
先滝湯ありあり湯ありあり温泉ありありその日より
新ありありありありありありありありありあり

後滝ありありありありありありありありありあり
働して血ありありありありありありありありありあり
とありありありありありありありありありありあり
の病の痛ありありありありありありありありありあり
りまき湯ありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありあり
滝は病を治しありありありありありありありありありあり
静ありありありありありありありありありありありあり
道ありありありありありありありありありありありあり
此痛ありありありありありありありありありありありあり
とありありありありありありありありありありありあり
腹氣ありありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありありあり

を叩くやうな神のごとく、氣とふくは合つて
ありまゆり迷をり
かゝの痛も是れ因〜又かゝのこりあは〜
たさ〜後赤い煙〜湯氣のさ〜通〜
あ〜汁とせし〜
腰痛も是れおな〜後ろ向〜か〜
赤い煙〜煙々大〜方〜
遠〜
は夏の痛よ〜感い〜
は〜
南新藤倉勅を為し、度会村
堂ヤルカ
度の大
度会村 本ク〜
は〜
この度会村の有り代〜
この度会村の有り代〜
この度会村の有り代〜
この度会村の有り代〜

と〜の博の上の〜
この湯釜と〜
度下乃い〜
の安彦氏の祖たる〜
が〜
つ〜
の〜

禁割
お換國
度会

一軍勢甲乙人々盤妨糧積事
一放火事
一討地人百姓一切了然此も終り
右條と證と信と然り於遠犯し事忘息し

被岩科 岩道 何れ知れ件

右岡秀吉

天正十八年卯月日

印 虎の足

此の巻は三行相市正の如知書又小田原山系五代水正八
年より天正十八年までの抄割し言征あり也

菅根七湯菜丑之巻 終

